

ポケットの中の不
思議なパラレルと
夜の広場 人妻女
子と・・・

夜二時、ベッドの上で夏終わりの外をガラスの両開き窓の近くから眺めて寝転びながら目線をスマホディスプレイに戻す。

気温は涼しい。寝転んでいる。

いつでも・・・・・その向こうでは温泉のバスタオルが見える時代である。

イヤフォンでディスプレイの音量を変

えながら、薄い水色のタオルケットをかぶりました。

不思議だな・・・・・・一人で呟く。

ちょっとのことで太ももとお尻の近く、
限界周辺は来てしまう時代だ。

バスタオルを肌色に巻いてそれで
も・・・・。

そして次の日の朝、不思議と気分が向いたので俺は近くの広場へ出かけた。丘のようなところにある。

持って行った大き目の黒いショルダーバッグはだいぶ使い古している。

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 〇

バスで少し時間はかかるが・・・。

バッグには何か入っていたと思う。

バス停からの坂、傾斜は上りだが緩やか
で・・・。

・・・・・・それは時代。

・・・・・坂から見上げる空は雲がまばら。季節は今のところいまいち分からない。

・・・・・ポケットの中に外、そしてディスプレイの向こうに妙なバスタオルが潜む怪しい時代である。

広場も同様に・・・・・。

緩やかな傾斜を登るのは久しぶりだったが、ふと思いついたようになんとなく行きたいと思ったのだ。

人妻の・・・・下着。

バス停から距離はあったが、普段からランニングをしている自分にとってそのスポーツは余裕だった。

公園とその横に美術館などがある公園であった。

「・・・・・さっきまで行っていた温泉でさ」

人妻女子三人が向こう側から歩いてく

る。

しばらく広場で過ごしていたあのこ
とだ。

バスを下りた後、

(体験版は以上になります。ご読了あり
がとうございました)